

# ぼくたちの夏

題材のねらい

災害時にボランティアとして活動した生徒の気持ちや生徒を応援する地域の人々の思いを知り、感謝の気持ちを相手に届けることがすばらしいと感じる道徳的心情を育てる。

教科との関連

道徳 2-(5)

日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。

展開例

	学習活動	指導上の留意点
導入	佐用町の水害の様子を知る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>「兵庫県の気象と水害」(P. 19)の資料を提示し、被害の大きさをとらえさせる。</li> </ul>
展開	<p>ボランティアに行こうとした佐用高校の生徒の気持ちを考える。</p> <p>町の人たちの励ましで、苦しい練習が楽しくも感じられたのはなぜか考える。</p> <p>胸に熱いものがこみあげてきたのはなぜか考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>高校球児の甲子園への強い思いをおさえた上で、それでもボランティアに行くことを選んだ心情を理解させる。</li> <li>町の人のお礼の言葉が、ボランティアをした生徒に元気を与えたこととおさえさせる。</li> <li>一回戦で負けたとき後悔しなかったことから、人の役に立つことの喜びに気づかせる。</li> <li>初めに、この夏の大会が甲子園へ行く最後のチャンスであることや、やめたくほど苦しい練習であったこととおさえる。</li> <li>町の人たちの励ましの声によって支えられ、練習に前向きになれたことに気づかせる。</li> <li>夏の県大会で勝ち進んだことを一緒になって喜ぶ町の人たちの様子から、生徒と町の人との繋がりの深さをとらえさせる。</li> <li>たくさんの人の支えがあって、夢を叶えた喜びや、達成感を味わうことができたことに気づかせる。</li> </ul>
まとめ	町に掲げられた感謝のメッセージを読んだ生徒の気持ちを考える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒のボランティア活動や、町の人たちの応援など、町の人たちと生徒が互いに支えあい、励ましあったことで地域との絆が生まれたこととその大切さに気づかせる。</li> </ul>

## ぼくたちの夏



2009(平成21)年8月9日、とつ然のごう前にみまわれ、ぼくたちの町はいっしょにして何もかもがうばわれてしまいました。土砂であふれた道路、こわれた家の前に立ちつくす人、たくさんのおもちゃ、多くの悲しい顔がありました。

ぼくの所属する佐用高校野球部は、大切な夏の大会に向けて練習をしなければいけないのですが、もう練習どころではありません。いても立ってもいられないのです。ある日、先生や主将の呼びかけで、みんなで佐用町の町にボランティアに行くことにしました。

「うっ、こんなにひどいとは……」

あまりの悲しさに、はじめは声も出ませんでした。

「とにかく、できることから始めよう。」

ぼくたちは、みんなの役に立ちたい一心で、家の中のどろや土砂をのけたり、水につかたたたみや家財を運び出したりしました。みんな必死です。どんなにたいへんな作業もつらいとは思いませんでした。そんなぼくたちに、ひたひたに、ひたひたに、町の人たちは、何度も何度も声をかけて、

「ありがとう、お兄ちゃんたち。」

と、温かく声をかけてくださいました。

「ぼくたちより何倍もつらい思いをしているはずなのに……」

かえって元気をもらえたような気分になりました。



そんなボランティアに明け暮れる日々が夏休み中続きました。

ようやく町も少しずつ落ち着き始め、ぼくたちも大会に向けた練習を再開しました。しかし、夏の大会は一回戦で敗れました。本番後のボランティア活動で満足な練習ができなかったことを後悔することはありませんでしたが、試合に負けたときは強く、悔みの涙の中はちんもくが流れました。

高校3年生、最後の夏がやってきました。町の復興とともに、ぼくたち野球部も、甲子園をめざして練習にはげむことができまことになりました。しかし、えん天下の練習は厳しく、もうやめたいと思うこともたびたびありました。



ある日、練習で心も体もつかれきってしまったぼくたちは、下を向いたまま歩いていた。商店街を通りかかったとき、

「お兄ちゃんたち、わたしたちの分までがんばってな。」

「がんばれ、野球部、応援してるよ。」

道徳 6年 52

と、町の人たちの温かい声があちこちから聞こえてきました。ぼくたちは、胸にじんじんとくるものを感じました。

「よしっ。」

ある日からは、あれだけ苦しいと思っていた練習がなんだか楽しくさえ感じられました。みんなで声をかけ合いながら、プレーできる喜びを感じながら白球を投げかけました。

夏の県大会が始まりました。ぼくたちにとっては最後の大会です。

試合前、主将がみんなに熱く語りかけました。

「ボランティアのときも地元のみんなから応援され、はげました。今度はぼくたちが少しでも町の人を助けるような試合をしよう。」

全員で必勝を誓い合いました。そして、チームは、順調に勝ち進み、ベスト16になりました。町の人たちも大喜びです。しかし、ベスト8まであと一歩のところまで、ぼくたちの夏はついに終わりました。

数日後、野球部のかんとくに1本の電話がきました。ぼくたちの夏は終わっていませんでした。甲子園大会の開会式に先導役として、ぼくたち野球部の主将が選ばれたのです。ぼくたちは、飛びはねて喜びました。どんな形であれ、夢の甲子園に行けるのです。

開会式当日、いよいよ入場行進です。ぼくたち野球部員は、4万人の大観衆とともにスタンドから声援を送りました。

主将が胸を張って歩いています。主将の行進に合わせてぼくたちも力いっぱい歩こうとしました。ぼくたちの胸に熱いものがこみ上げてきました。

甲子園球場をうめつめた観客からの温かい声、いつまでも鳴りやみませんでした。

(佐用町立佐用小学校 道徳資料室より)



佐用高校の卒業式直前、佐用町では、商店街のあちこちに、佐用高校の生徒への感謝のメッセージがかかげられました。

道徳 6年 53



【参考】佐用町ホームページ  
[http://www.town.sayo.lg.jp/cms-sypher/open\\_imgs/info/0000002342.pdf](http://www.town.sayo.lg.jp/cms-sypher/open_imgs/info/0000002342.pdf)